

令和元年5月20日現在

機関番号：13301

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2016～2018

課題番号：16K13193

研究課題名(和文) 南米を旅した作家たちの軌跡と作品の研究 相互交流の観点から

研究課題名(英文) A study of Japanese writers who traveled to South America, From the viewpoint of mutual exchange

研究代表者

杉山 欣也 (Sugiyama, Kinya)

金沢大学・歴史言語文化学系・教授

研究者番号：90547077

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：三島由紀夫と島崎藤村を中心に、南米を旅した作家の動向と文学への反映を研究した。その成果はそれぞれ共著書(2016年)および2回の国際学会(2016年、単著論文発表済。2018年、共著論文投稿済)その他によって公開した。また、三島由紀夫に関してイタリアで開催された国際シンポジウムで発表を行い、共著書を刊行したほか、またサンパウロで開催されたイベント「三島由紀夫再発見」など、多くの講演を行ない、ブックレットを刊行した。

さらに相互交流という観点から、ブラジル日本移民の文学活動に関心を持ち、論文3本を執筆した。2本はすでに公開済み、1本は刊行を待っている状態である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本移民社会の存在や経済協力など、ブラジルにとって日本は遠くて近い国である。そのブラジルを訪問し、またブラジルでの関心も高い作家の足跡を調査し、そのテキストを分析して日本・ブラジル双方で公開したことは大いに意義のある行為であると考えている。一方、日本においてブラジルはいまだに遠い国ではないだろうか。しかしブラジルには日本移民がおり、日本語文学がある。論文発表と講演活動を行なうことで、その存在意義や価値を日本に知らしめた。それは移民社会の拡大する日本においても有意義なことであったと考える。

研究成果の概要(英文)：The research on the writers who traveled to South America and their reflection on literature, especially Yukio Mishima and Toson Shimazaki. The results were published by joint-work (2016) and the international conference (2016, Published a paper. 2018, co-author paper submitted). In addition, I made a presentation at the international symposium in Italy about Yukio Mishima, published a joint-work and also gave many lectures, for example at the event "Rediscovery Yukio Mishima" in Sao Paulo, and published a booklet.

I was interested in the literary activities of Brazilian Japanese immigrants in terms, and wrote three articles. Two have already been published and one is awaiting publication.

研究分野：日本文学およびブラジル日本文学

キーワード：三島由紀夫 島崎藤村 ブラジル日本文学 紀行文

## 1. 研究開始当初の背景

19世紀末以降、南米には日本より多数の移民が渡航し、今日に至る日系社会が形成された。日本から南米への移民が開始されたその当初から一部の日本人移民たちは農業等の仕事のかたわらで文芸創作に勤しんできた。1908年に第1回ブラジル移民船・笠戸丸の船内ではすでに句会などが催されているほどである。以来、もっとも多くの移民が渡ったブラジルを中心に現在まで文芸活動はさかに行われ、現地で流通した雑誌や新聞等さまざまな日本語媒体に掲載されて親しまれてきた。そしてそれらの存在によって、私たち現代の日本在住者も調査すれば目に触れることができる。

このように、移民の増大に伴って南米に対する日本国内の関心が高まったことを背景に、日本で活動する作家たちの一部に、南米に関心を持ち、南米を訪れる機会を得る作家が増えていった。

何人が例を掲げよう。石川達三は、移民監督として移民船に乗り組み、その様子を描いた小説「蒼氓」で第1回芥川賞を受賞した。また島崎藤村は日本ペンクラブ会長としてブエノスアイレスで開催された第14回国際ペンクラブ大会参加の途次でサンパウロ等の移民社会と交流を持ち、紀行文「巡礼」を記したが、サンパウロでは彼を記念する文学碑が建立され、ブラジル藤村会がその懸賞に務めているなど、今日までその交流は続いているとも言える。

一方で、第二次世界大戦後の国交回復直後にブラジルを訪れた三島由紀夫は日本人社会と一定の交流を持ち、「アポロの杯」ほかいくつかの作品でブラジルを描いているが、その交流についてつまびらかにすることはなく、むしろ日本人社会を忌避するような行動をとっている。

そして、それらの作家の足跡および文業について、現地踏査を含む研究はほとんどなされていないのが研究開始当初の状況であった。

1980年代以降、双方の国家経済の推移から、南米に対する日本からの移民がほとんど途絶えたことによって、日本語を母語とする一世および準二世（子供の頃、親に伴われて移民した世代）は急速に減少しつつある。むしろ1990年の入管法改正以降、日本社会がブラジルを中心とする南米日系人の「デカセギ」を多く受け入れるようになったことから、南米日系社会は移民の送り出し側となっているほどで、日本語文芸の担い手も限られているのが現地日系社会の現状である。

そして、ブラジルを中心とする日本語移民文学についてはこれまでもいくつかの研究があるが、そのような、まさに今現在における文芸活動の状況調査・考察はほとんど行われていないのが実情と言える。

上記のような状況下で、現在の日本語文学の書き手たちが日本人作家の訪問をどのように継承し、どのように活用しつつ、文芸活動を行なっているかを考察することが急務であると考え、研究に着手した。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は1でも記したように、南米を旅した日本の作家たちによる文学の研究である。それ自体はあまり例のない研究ではあるが、その際に現地日系社会の状況や研究を踏まえて調査・考察し、それによって日本と南米の文化交流の足跡を明らかにすることが、本研究独自の目的ということになる。

南米を旅した作家といえば、堀口大學・石川達三・島崎藤村・三島由紀夫・大宅壮一・石原慎太郎・川端康成・大城立裕・北杜夫・開高健・吉増剛造といった名前が思い浮かぶ。彼らは一見すると活動時期もその作風もばらばらで、一部を除くと文学的な影響関係も指摘されることはないが、時期こそ異なれ、南米を旅し、その旅を小説や紀行文、あるいは詩歌に書き記しているという共通点を持つ。

研究代表者である杉山は本研究着手以前に、三島由紀夫のブラジル体験の意味に関する考察の中途段階にあった。三島由紀夫は紀行文「アポロの杯」(1952年)に結実する世界旅行の途次でブラジル(リオデジャネイロ、サンパウロ、リンス)に立ち寄っている。一ヶ月以上に及ぶその滞在は「リオの灯火の中へなら墜落してもいい」という第一印象から始まり、ほとんど陶酔といってもよい感情のうちにブラジルに過ごした。そして帰国後、「不満な女たち」「白蟻の巣」「複雑な彼」などブラジルを舞台に小説や戯曲を著したが、彼はその鮮烈な印象を大切にするためという理由で、二度とブラジルへは行かないと宣言し、実際にブラジル渡航はこの一回に限られた。

杉山は、その調査過程で、三度にわたってブラジル調査に赴き、資料や証言を探し求めるなかで、三島以外にも多くの作家がブラジルやその他南米へ赴き、現地の日系人と関わり合いな

から様々な作品をものしているという事実にも強く惹きつけられた。しかし、3年間という時間では上記の作家すべてを調査することは不可能である。そこで、調査の中間段階であった三島由紀夫と、新たに島崎藤村の二人に焦点を絞り、そのブラジルにおける足跡の調査と、彼らによって書かれた紀行文の言説分析とを行い、その差異を浮き彫りにすることで彼らがブラジルで「何を見て何を書かなかったか」を明らかにすることとした。それによって彼らの現地に対する観察や筆致の方向性、また現地日系社会との関わり方を分析することができると考えた。

杉山が研究課題名に掲げた「相互交流」という観点は、本研究を特徴付けるものとなるため、研究代表者自身が現地日本語作家との交流をもち、その創作現場に立ち会うことをもうひとつの目的とした。そのために、杉山が所属する金沢大学のサバティカル制度を活用、サンパウロ大学客員教授として10ヶ月間だけではあるがサンパウロに移住した。

### 3. 研究の方法

通常の調査に関わる点としては、計画第1年の2016年度にサンパウロに移住し、現地の図書館（文協図書館、国際交流基金図書館、サンパウロ大学鈴木悌一図書館）を活用し、資料の分析に努めた。また、サンパウロ、リオデジャネイロ、マナウス、クリチバ、ポルトアレグレを訪問し、現地日系社会と接触し、2に記した作家たちに関する情報を得たほか、現地調査等を行なった。

また、2に記したように、「相互交流」を重視する観点から、やはり2016年度のサンパウロ滞在期間を中心に様々なコネクションを築いた。これによって、ブラジル日系文学会やブラジル藤村会、またブラジル能楽連盟といった現地の文芸サークルの活動取材し、ときには一緒に句会などの座に加わることができた。

なお、それらで得た知見は複数の論文、国際学会における発表、シンポジウムなどでの講演の機会を通じて社会に還元した。それは日本社会だけでなく、現地日系社会においても同様に行うこととした。研究期間中のブラジルにおける講演・シンポジウム登壇・学会発表は10回を超える。また、ブラジルおよびイタリアの学会誌、文芸誌等に論文を投稿し、再録を合わせると現時点で4本の研究成果を公表しており、いくつもの機会を通じて日本人作家の南米体験の意義や日本語文芸の意義を日本・ブラジル双方の文芸愛好家に対して明らかにし、ひいては日本文学の魅力を伝えることになったと考えている。

さらに、「相互交流」の観点を現代に生かすべく、ブラジル日系文学の現在を日本に知らせることをも活動に含めた。これに関しては、ポルトガル語で書かれた日系文学であるオスカル・ナカサト「にほんじん」の日本語訳を現地で入手し、原著者および翻訳者の許可を得て朗読公演会を開催することで広く世に知らせる方法をとった。そして2017年から2018年にかけて実際に3回の公演を行ない、『北陸中日新聞』紙上に紹介された。さらに2019年8月にも公演が予定されている。

### 4. 研究成果

第一に、ブラジルにおける日本作家の足跡についてその意味を報告したい。

まず、三島由紀夫については、5に記した論文およびいくつかの講演の機会を通じて日本およびブラジルに伝えた。概要としては、1952年の三島由紀夫のブラジル滞在、ことにリオデジャネイロ訪問には、彼自身のセクシュアリティの確認という重要な意味が付与されていたことを、彼自身の表現や周囲の証言などから明らかにした。さらに、そのことを秘する必要もあって、当時の日系社会を揺るがせた問題である勝ち組負け組問題の余波の残るサンパウロを早々に出立したと結論づけた。これは主に共著『文学海を渡る』（2016年、三弥井書店）に掲載した論文「三島由紀夫「アポロの杯」におけるリオ、サンパウロ-見て書かなかったこととしての旅行記」に執筆した。さらに、南米体験のみならず、北米体験やヨーロッパ体験の意味にも踏み込んだ。これについては、ブラジルの国際学会において発表し、その学会誌 *Anais do ENPULLCI24* において論文「三島由紀夫における国境認識-「アメリカ」を視座として」（2017年）を発表したほか、金沢大学で編集した教科書「グローバル時代の文学」（日本語版および英語版）において広く社会に還元しつつある。ヨーロッパ体験については、イタリアで開催された国際シンポジウムに参加、そこで刊行された論文集に「L' iconografia del "martirio di San Sebastiano" e Yukio Mishima」を発表した。

次に、島崎藤村について。ブラジル藤村会の活動に取材することによって得た知見を元に2017年から2018年にかけて、国際学会を含むいくつかの学会・シンポジウムで発表を行い、国際共著論文として投稿済みである。概要としては、彼の紀行文「巡礼」の言説分析を通して近代日本文学の海洋体験としてこの記述をとらえ、船内の移民たちとの交流や観察、また寄港地における日本人社会の観察を通して島崎藤村のナショナリズムの醸成過程と、表象とし

ての「海」の意味を分析した。

第二に、彼らを受け止めたブラジル日本語文学の状況について報告する。

研究代表者がサンパウロに滞在した2016年から2017年にかけては、2018年のブラジル移民開始110周年に向けて日系諸団体の活動が活発化した時期でもあるが、一方で移民の高齢化という現象が露わになった時期でもあった。

衰退期とも言いうるその状況下で、日本語文芸の担い手たちは何を考え、どのようなものを書き記し、どのような活動を行なっているか、その場に直接同行して取材することができた。

ことに密着取材ができたのはブラジル藤村会、ブラジル日系文学会、ブラジル能楽連盟の諸団体である。彼らの書いた作品を読み、彼らの話を聞き、彼らの公演や会合に参加して得た理解から、ここが日本語文学の汽水域であるという認識を得た。「汽水域」とは海水と真水が混じり合う水域のことである。ブラジルにおける日系文学はながらくその中心的な担い手であった日本語の書き手が減少し、いずれ消滅の危機にある。しかし彼らの営為はポルトガル語話者である二世以降の世代や非日系ブラジル人たちに継承され、ポルトガル語文学として残っていくであろうことを実感した。いわば「ブラジル日系文学」から「日系ブラジル文学」への変容過程をポルトアレグレのパトス湖になぞらえて「汽水域」と名付けたのである。そしてポルトガル語化された日系文学の現時点での代表作品を、現地でジャブチ賞という文学賞を受賞したオスカル・ナカサト「にほんじん」という作品に見出した。これが日本で朗読公演という形で紹介したものである。

こちらの側面に関しては、新たな概念の提唱の意味を込めて「日本文学の汽水域にて」「日本語文学の汽水域」「汽水域の文学」としてのブラジル日系文学」という3本の論文に表し、日本とブラジル双方にて発表した。さらに、日本で発表した「日本語文学の汽水域」はブラジルにおける有力な文芸誌『ブラジル日系文学』への転載が決まった。それは、その観察がブラジル日系社会においておおむね認められたことを示していることから、ブラジル滞在をして研究活動を行なった意味があったと考えている。

なお本研究の過程においては日本、ブラジル、イタリア、アメリカ合衆国等の多くの方々の協力を得た。あまりに多数になるため個人のお名前の列挙は控えるが、サンパウロ大学、州立リオデジャネイロ大学、連邦アマゾナス大学、連邦リオグランジドスル大学、ISI Florence、ブラジル日本文化福祉協会、国際交流基金サンパウロ文化センター、サンパウロ人文科学研究所、ブラジル藤村会、ブラジル日系文学会、ブラジル能楽連盟等、多くの機関とそこに在籍する方々の協力なしには本研究の遂行はできなかった。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計3件)

- 1: 杉山欣也「「汽水域の文学」としてのブラジル日系文学」、『ブラジル日系文学』、査読なし、61号、2019年、頁不明(現時点で未到着のため)
- 2: 杉山欣也「日本語文学の汽水域-日系ブラジル文学の現在」、『昭和文学研究』、査読なし、招待、78巻、2019年、98-110頁
- 3: 杉山欣也「三島由紀夫における国境認識-「アメリカ」を視座として」Anais do ENPULLCI、査読あり、24巻、2017年、267-281頁

〔学会発表〕(計11件)

- 1: パネル発表(代表: 根川幸男) 根川幸男、飯窪秀樹、杉山欣也、木谷真紀子「近代日本人の海洋体験とその歴史・文学上における影響」(国際学会)  
第25回全伯日本語・日本文学・日本文化大会教師会/第12回ブラジル日本研究国際学会  
2018年、於・サンパウロ州立カンピーナス大学(ブラジル)
- 2: 杉山欣也「島崎藤村のブラジル訪問を考える-相互交流の観点から」  
日本近代文学会北陸支部会大会  
2018年、於・湖月館(石川県)
- 3: 杉山欣也「ブラジル日系文学の「現在」-ブラジルの能楽にふれて」  
金沢大学国語国文学会  
2017年、於・金沢大学サテライトプラザ(石川県)
- 4: 杉山欣也「古典を携えて国境を越える-島崎藤村とブラジル」(国際学会)(招待講演)

東洋と西洋古典芸術におけるフロンティラ（境界）その内在性  
2017年、於・州立リオデジャネイロ大学（ブラジル）

- 5：杉山欣也「三島由紀夫のブラジル体験」（講演）  
サンパウロ人文科学研究所研究例会第22回  
2017年、於・サンパウロ人文科学研究所（ブラジル）
- 6：杉山欣也「三島由紀夫における聖セバスチャン図の影響」（国際シンポジウム）  
Italia e Giappone a confront.cultura,psicologia,arti  
2016年、於・ISI Florence（イタリア）
- 7：杉山欣也「三島由紀夫における「国境」-アメリカを視座として」（国際学会）  
第24回全伯日本語・日本文学・日本文化大会教師会／第11回ブラジル日本研究国際学会  
2016年、於・連邦アマゾナス大学（ブラジル）
- 8：杉山欣也「グローバル時代の「日本」文学」（国際学会）（招待講演）  
第24回全伯日本語・日本文学・日本文化大会教師会／第11回ブラジル日本研究国際学会  
2016年、於・連邦アマゾナス大学（ブラジル）

〔図書〕（計6件）

- 1：杉山欣也、木谷真紀子、Andrei Cunha ほか共著、国際交流基金サンパウロ文化センター  
『Redescobrimo Yukio Mishima cinema/literatura/performance』、2019年、15（4-5）頁、「Resumo da palestra “Confessões de uma Máscara e o Mar”」（単著）執筆
- 2：Yuichi Kasuya, etc. 『Literature in a Grobal Age』2018年、86（71-84）頁、  
「Japanese Literature: Yukio Mishima's The Sound of Waves and America-Overseas Experiences in Modern Japanese Literature」（単著）執筆
- 3：Stefano U.Baldassarri 編、Angelo Pontecorboli Editore（フィレンツェ）『Italia e Giappone a confront:cultura,psicologia,arti』、2017年、263（205-222）頁、  
「L' iconografia del “martirio di San Sebastiano” e Yukio Mishima」（単著）執筆
- 4：和泉邦子・岩田礼・岩津航・上田望・佐藤文彦・杉山欣也・鈴木暁世・高田茂樹・高山知明・西村聡・新田哲夫著、金沢大学人間社会学域人文学類、『言語文化の越境、接触による変容と普遍性に関する比較研究』、2017年、138（65-74）頁、「日本文学の汽水域にて」（単著）執筆
- 5：岩津航・佐藤文彦・杉山欣也・鈴木暁世・高田茂樹・西村聡、三弥井書店、『文学海を渡る』、  
2016年、278（159-189）頁、「三島由紀夫「アポロの杯」におけるリオ、サンパウロ-見て書かなかったこととしての旅行記」（単著）執筆
- 6：粕谷雄一、上田望、小原文衛、山本卓、杉山欣也著、金沢大学、『グローバル時代の文学』、  
2016年、77（65-74）頁、「三島由紀夫「潮騒」とアメリカ-日本近代文学の「海外」体験を考える」（単著）執筆

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。